

リマにおけるバリアードス（非合法街区）の変容

梅 原 隆 治

（平成19年9月21日受理 最終原稿平成19年11月28日受理）

世界遺産にも登録され、スペインのにおいを漂わせているコロニアル・タウンのペルーの首都リマ（Lima）も、とりわけ20世紀の後半からは、肥大化とスラム化という都市問題に悩まされてきている。都市の数が少ないままに人口爆発を体験し、膨れ上がった農山村の極貧・貧困層が、仕事と富を求めて大量に流入してきたからである。結果として、ブラジルのファベーラ（favela）と同質のバリアードス（非合法街区）が、リマの周縁部に多数誕生した。都市地理学や都市社会学の視点でその形成過程と分布に注目し、そこでの社会生活の一端にも触れてみたいと思う。

キーワード : リマ バリアードス プエブロホーベン スラム 都市問題

はじめに

2003年のペルー統計情報院年報によると、ペルーの総人口は約2,754.7万人で、そのうちの29%近い約791.2万人がリマ首都圏に住んでいる。ペルーにおける都市人口比率は約72.2%、農村人口のそれは約27.8%であるから、リマには都市人口の約45%が集中していることになる。表1はペルー人口の地域的分布を示しているが、リマをはじめとする都市の多いコスタ（海岸部）の急速な増加は、シェラ（山岳部）からの人口流出の結果と見ることができる。シェラや農村部における出生率は高く、極貧困層が高い比率を占めることもあいまって、都市への人口流出の要因となっている。

表・図1 ペルーの地域別人口比率

地 域	面積%	1876	2001
Costa（海岸）	11	24	53
Sierra（山岳）	26	75	36
Selva（森林）	63	1	11

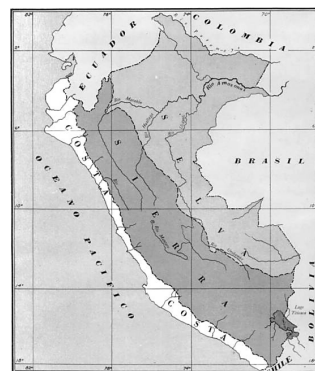
Costa：アタカマ砂漠（世界最乾燥地）

Sierra：アンデス（世界で2番目に高い山脈）

Selva：アマゾン（世界最大の熱帯雨林）

出所：Coleccion Huascarán, Lima

（Chambers 2005 による）



このようなペルーの都市化の特徴をまとめると、次のようになる。まずは都市化のスピードが急速であること、ついで少数の都市、主にリマに人口が集中していることである。さらには基本的ニーズを満たしている都市民と満たしていないものとの格差が大きいことや、都市に居住する低所得層に対する差別があることなどがあげられる。それらの現状を確たる形で視認できるものとしていわゆるスラムがあり、それを指標にしてリマの都市問題、ひいてはラテンアメリカ途上国世界の都市の抱える問題の一端を浮かび上がらせてみたい。

リマのアンデス化とスラムの出現

1 リマの沿革

リマは、インカ帝国を征服したF.ピサロ（Francisco Pizarro, 1475?-1541）によって、1535年1月18日に建設された。ペルーの海岸線のほぼ中央部に位置し、植民地期はペルー副王領の首都として、スペインの南アメリカ植民地支配の中心地となり、南アメリカ第1の都市として繁栄した。図2～6は、Juan Gunther Doeringuが撰し、序と注を記した“*PLANOS DE LIMA 1613-1983*”¹⁾に収録されている30図面の一部で、図2（1. Reconstrucción histórica de José Barbagelata hecha en 1945 [1613]）は1613年のリマである。リマック川左岸（南部）の政庁を中心に、整然とした碁盤目状の計画植民都市の体裁が窺える。その百年後の姿が図3（6. Amédée Frezier [1716]）であるが、リマック川右岸が少し開け、左岸の市街地が市壁で囲われたものの、都市規模としてはさしたる変化はない。

1821年の独立以降はペルーの政治、経済、文化の中心として繁栄したが、大都市として目覚ましい発達を始めたのは、比較的最近のことである。独立当初の姿が図4（8. José Barbagelata. *Lima en 1821* [1944]）から読み取れるが、図3のそれと明瞭な差異は認められない。だが19世紀末の図5（13. Cuerpo Técnico de Tasaciones [1896]）には市壁がなくなり、その外側へ新市街が展開している様子が見て取れる。そして図6（21. Enrique Silgado [1908]）が示すように、20世紀初頭には、太平洋岸へ向けて街区が展開していつている。

大統領府やカテドラル（Catedral, 大聖堂）が面するアルマス広場（Plaza de Armas）周辺の旧市街は、スペイン風の建築物や植民地時代からの古い教会が多く、ヒロン・デ・ラ・ウニオン（Jiron de la Union）などの通りを中心とする繁華街は、狭い格子状の道路が広がっている。これらの歴史地区は、1988年に世界文化遺産に登録された。これに対して、サン・マルティン広場（Plaza San Martin）を中心とする新市街は、広い道路に近代的なビルが多く、旧市街とは対照的である。1950年代以降の都市工業化の発展に伴い、地方農村部から急激に人口が流入し、1940年代に70万に満たなかった首都の人口は、90年代には550万を超えるに至った。特にこの急激な人口の都市集中過程の中で、郊外の新興住宅地の外に、これをとりまくようにスラム（貧民街）（70年代以降プエブロ・ホーベン [pueblo joven 若い町] と呼ばれる）が形成され、大きな問題となっていた。

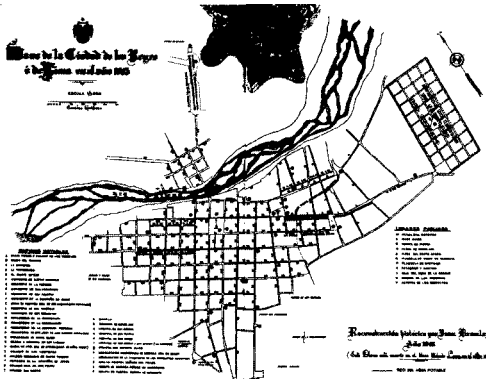


図2 1613年のリマ

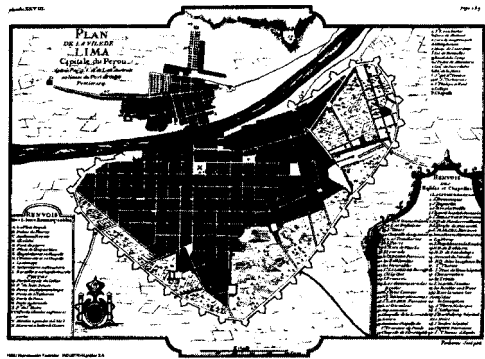


図3 1713年のリマ

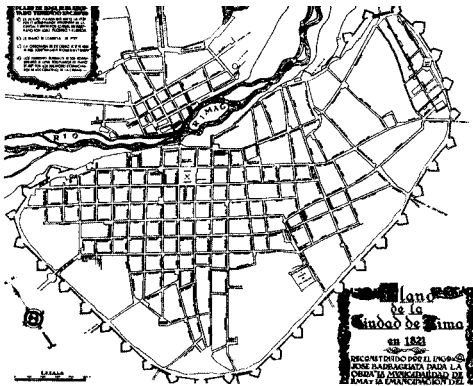


図4 1821年のリマ

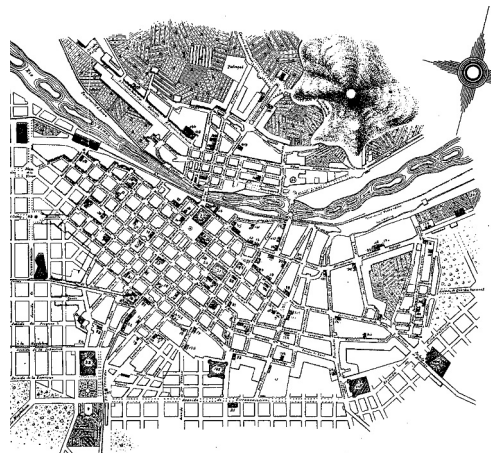


図5 1896年のリマ

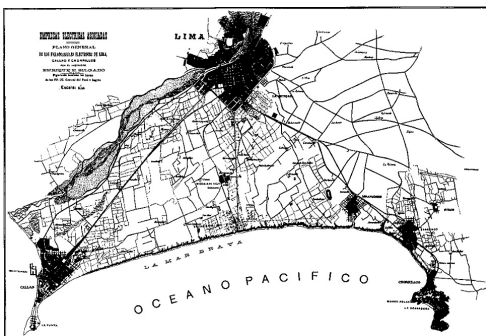


図6 1908年のリマおよび近郊

（図2～6は“PLANOS DE LIMA 1613-1983”所収）

2 首位都市リマとアンデス化

産業革命の遅れた、または未体験の発展途上国には、都市が少ない。少ない中で植民地期の首都や一部の港湾都市（かつての一次産品積出港）のみが大きく、他の都市（ほとんどがコロニアル・タウン）との格差が大きいのが特色である。ペルーもその例にたがわず、植民地時代からリマへの中央集権化が進み、総督府の置かれていたリマが、第二都市アレキパ

(Arequipa) の約11倍、全人口の約25%を占め、隣接するペルー最大の港湾都市カヤオ (Callao) を包含したリマ首都圏としては3割に肉薄する勢いなのである。それだけの人口であるから、全国の消費量の50%、国内総生産の55%、国内工業総生産の75%、商業銀行の貸付の80%、公共投資の85%、政府支出の97%が集中している。金融取引の95%、電力消費の75%、全医者数の66%を占めているとの統計もある。²⁾

このようなリマへの超中央集権主義 (HIPERCENTRALISMO) は、地方経済を不活性化し、地域的投資や外国投資、人材育成を妨げ、国民の3分の2を周縁化した。ペルー社会では、全住民の約50%が貧困ライン³⁾以下 (1日1ドル以下) の生活を送っており、上流階級、中流階級、下層階級の3階層の下に周縁階級を構成している。そして先住民のほとんどがこの階級に属しているのである。その彼らが、さまざまな点で直接首都に依存するようになり、農山村の貧困・極貧困層が都市部へ押し出され、リマの肥大化とスラム化をもたらしたのである。

植民地支配時代の都市部は完全に白人社会であったが、1920年代に始まる農村部から都市部への人口移動が原因で、先住民社会であるアンデス山岳地帯農民のリマ市をはじめとする都市部への大量流入により、ペルー都市部ではアンデス化が進んできた。⁴⁾

3 スラムの出現とその呼称

ペルーでは、1970年代から都市への人口集中が顕著に見られるが、とりわけリマ首都圏に激しく、リマ郊外に非合法住宅地域が形成されている。これら非合法住宅地は、バリオ・マルヒナル (Barrio Marginar)、バリアーダ (Barriada)、プエブロ・ホーベネス (Pueblos Jovenes)、アセントアミエント・ウマーノ (Asentamiento Humano) などと呼ばれている。「ペルーにおける都市化と貧困問題」を著わした福井千鶴は、これらの表現を列挙し紹介するものの、論文の中では「プエブロ・ホーベネス (不法占拠地)」を代表格として多用している。一方 ' The Barriadas of Lima , Lima's Slums: Problems or Solutions? ' というタイトルで報告したリバプール・ホープ大学 (Liverpool Hope University) のチェンバーズ (Bill Chambers) 教授は、' Squatter Settlements ' の項では BarriadasをUrbanizations PopulatesやUrbanisationes Marginales、Pueblos Jovenes、Asentamientos Humanosと並記しているものの、主題はもちろんのこと、節項の位置ではBarriadasを必ず用いている。⁵⁾ 本稿作成に当り多用したクックバーンの " La ciudad illegal " もbarriadasを全面的に用いている。⁶⁾

確かに筆者が最初にこのスラムに出会った1970年代は、ペルーの知人も地元住民も「プエブロ・ホーベン」と呼んでいたように思う。図2～6が示すコロニアル・タウンとしてのリマ市に対して、その周辺に新たに誕生した街区であるから「若い町」でよかったのであろう。ただ、それが雨後の竹の子の如くに増殖する過程で、barriada (非合法家屋) が群れをなすbarriadas (非合法街区) が役所文書などで多用されるようになったのであろう。センサスの多くがbarriadasを使っていることから、本稿でも「バリアーダス」を「非合法街区」の訳称とあわせて用いて行く。「プエブロ・ホーベン」は、引用箇所や通称名としてのみ使用することにする。

4 バリアードス形成期

表2からは、1930年代を迎えるまでの増加は特段のものではないことがうかがえるが、それ以降の増加は目覚しく、市域面積も急速に拡大していることが読み取れる。それが郊外でのバリアードスの増加によることが、表3からも窺い知れるのである。1940年における都市部と農村部における人口構成比率は、47.4%：52.6%で農村部が上回っていたが、1972年には59.5%：40.5%と逆転しており、この間に激しい農村部から都市部への人口移動があったことが分かる。

表2 リマの人口・人口密度の推移

年	人口	面積 (km ²)	人口密度 (人/km ²)
1903	130,285		
1908	140,884	12.92	10,904
1920	173,007*	10.20*	16,961
1931	273,016*	20.37*	13,403
1940	645,172	56.30	11,460
1961	1,845,910	206.12	8,956

* Cercado, La Victoria, Rímac区のみか？

出所：INEI, 1997, p.120. (Cockburn, p.65)

表3 リマのバリアードス(非合法街区)の推移

期間	バリアードス	%	年平均増加数
1913-1939	14	6.0	0.5
1940-1945	27	13.0	5.4
1946-1948*	15	7.0	7.5
1948-1956	81	38.0	10.0
1956-1960	76	36.0	19.0
計	213		

* 1948年は10月以降とそれ以前

出所：Meneses, 1998, Anexo 1. (Cockburn, p.88)

この間のバリアードスの形成過程を下の図7・8を参考に見てみると、次のように集約できよう。すなわち、バリアードスの実数としては1948年の10月以降が圧倒的に多く、20世紀上半期のほぼ4分の3を占めている。どの時期をとっても、誰の土地とも普通は考えない砂漠の公有地が当然多く、7割近くを占めている。公有地での占拠の仕方は当然、突然の居座りパターンが中心で、不法侵入占拠が約半数を占める。人づてにやってきて徐々に居ついていく漸進的占拠のパターンも、公有地では約4割と高い。私有地とはいえ目が行き届かないところではバリアードスが展開する（全体の4分の1強）。とはいえ係争を避けるためであろうか、仲介者的なものが介在する賃貸しや小作のパターンが目立ってくる。もともとの係争地では、その傾向が一層強い。といったことである。

図9は20世紀半ばの1957年におけるリマ周辺のバリアードス（非合法街区）の分布を示す。この時点ではインナーシティの一部を含むものの、その大半はリマック川沿いといってよい。湿潤な日本の河川と比較するわけにはいかないが、いわゆる自然堤防沿いの砂丘列上である。それに既存市街地の北東部の砂丘末端部を含めてスラム化していつていることが理解できる。いわゆるセントロを反時計回りに取り囲み、リマの外港カヤオ（国際空港もある）をまっすぐに目指しているかのようなのである。その時点の働き口のありようと無縁ではなからう。今から見ればまったくの市街地であるが、その後の半世紀で如何に変わっていくのかを、次章以降で眺めてみたい。

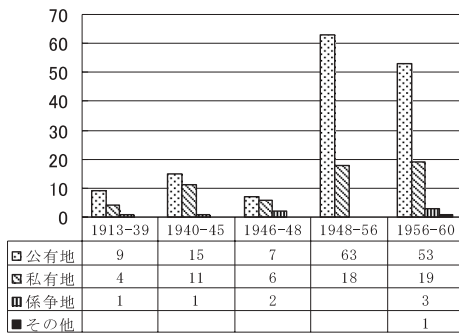


図 7 リマにおけるバリアーダスの元土地の所有形態

出所：Meneses, 1998, Anexo 1.
(Cockburn, p.89 より作成)

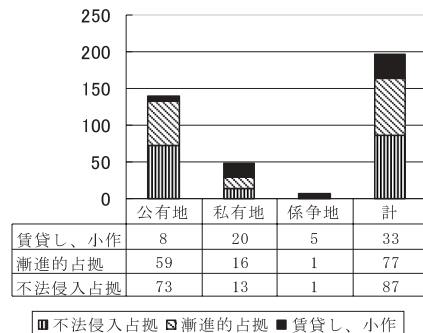


図 8 バリアーダスの所有形態別様態

他に、上表の分類に含められない16例がある
出所：Meneses, 1998, Anexo 1.
(Cockburn, p.98 より作成)

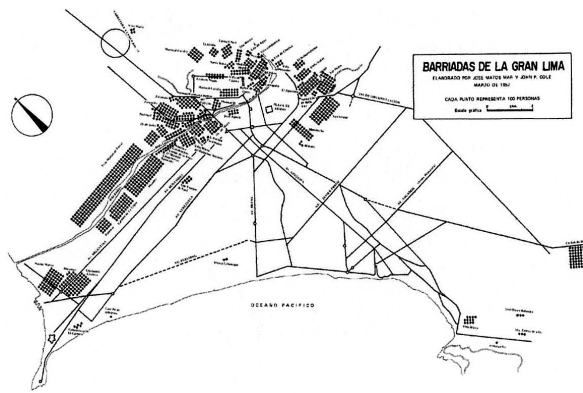
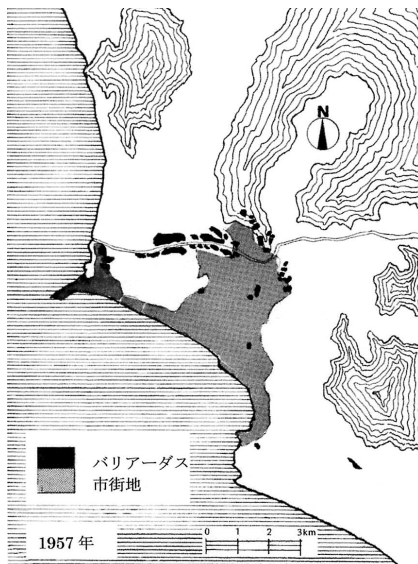


図 9 1957年の大リマにおけるバリアーダスの展開と分布 Mar (1977) による。

20世紀後半以降のスラムの展開

1 都市人口の増加とその背景

下の表 4 が示すように、ペルーでは当初農村部人口が多数を占めていたが、1961年から1970年を境に都市部の人口割合が多くなり農村部人口を超えた。1940年から1961年では都市部より農村部の方が人口構成比率（47.4%：52.6%）が上回っていたが、1961年から1972年の期間には都市部の人口構成比率が農村部のそれを上回り（59.5%：40.5%）、逆転した。1972年以降も都市部の人口構成比率は増大し続け、1993年には70%（総人口約2,200万人に対し都市部約

1,550万人）にも達し、顕著な都市化現象が認められる。

さらに都市部の年平均増加人口を見ると、1940年から1961年の期間（年平均12万弱）の2.5倍以上の伸びで、1961年から1972年の間が年平均で30万人を超えている。同期の総人口の年平均増加数に占める都市人口のそれは92.5%と非常に高い。また1993年から1997年の期間も年平均で50万人近く増え続けており、再び都市部の人口増加が激しくなっている。このことから、1961年から1972年にかけてが第一次の農村部から都市部への移住ブーム期、1993年から1997年にかけてが第二次移住ブーム期と、移住ブームを二期に分けることが出来る。第一次ブームでは、著しい都市部への移住が農村部の人口比を大きく落ち込ませる結果となった。一方第二次ブーム期には、移住に加え、都市部内における人口増加も見られる。これには、都市部の非合法街区における合法化の推進が大きな原因となっている。

表 4 ペルーにおける都市・農村人口の推移

単位：千人

年 次	1940	1961	1972	1981	1993	1997
総 人 口	6,208	9,907	13,538	17,005	22,048	24,371
都 市 人 口	2,197	4,698	8,058	11,092	15,459	17,440
農 村 人 口	4,011	5,209	5,480	5,913	6,590	6,931
都市対農村人口差	- 1,814	- 511	2,578	5,179	8,869	10,509
都市人口比率	35.4%	47.4%	59.5%	65.2%	70.1%	71.6%
農村人口比率	64.6%	52.6%	40.5%	34.8%	29.9%	28.4%
総人口の年平均増加	176.1	330.1	385.2	420.2	580.8	
都市人口年平均増加	119.0	305.5	337.1	363.9	495.3	

出所：“PERU 97 ANUARIO ESTADISTICO”, CUANTO S.A., 1997, p.206

（福井、1999、pp.60.61.より作成）

農村部から都市部への人口移動の背景としては、都市部では生活権の獲得機会に恵まれ、生活手段の確保の機会が豊富にある、といったことが考えられる。農業生産に対する環境が劣悪なアンデス高地を広くかかえるペルーでは、1920年頃より農村部から都市部への人口移動がはじまり、21世紀へ入った今日でも続いている。この主要因は、山岳農村部の劣悪な環境と生産性の低さ、小零細農業などの原因による低所得が貧困を生み、これら貧困層の都市部における経済生活手段の確保への期待感が、貧困層農民の都市部への移動の動機づけになっている。

2 リマへの人口集中とバリアードスの増加

都市部への人口移動が顕著とはいっても、その大半がリマ県およびリマ首都圏であることが下の表 5 から読み取れよう。ペルー24県1特別郡の県別人口増加数は、1940年から1997年にかけて1735万人増加で、内リマ県が622万人で35.8%、リマ首都圏では640万人・39.6%、ちなみに他県で一番多いピウラ県で106万人・6.1%であった。1993年から1997年では、リマ県が55.8万人で33.9%、リマ首都圏は71.6万人で41.3%、他県最大のラ・リベルタ県が10.4万人の6

表 5 ペルーの年次別地域別人口推移

単位：千人

	年別地域別人口構成						1940年基準		1993年基準	
	1940	1961	1972	1981	1993	1997	1940-1997		1993-1997	
	総数	総数	総数	総数	総数	総数	増加数	構成比	増加数	構成比
全 国	7022	10418	14119	17762	22639	24372	17350	100%	1733	100%
年人口増加率	1.7%	2.9%	2.8%	2.5%	1.7%	1.8%				
(海岸地帯)	2226	4423	6803	9130	11866	12882	10656	61.4%	1016	58.6%
リマ	849	2093	3595	4993	6479	7067	6218	35.8%	588	33.9%
カヤオ	84	219	332	454	648	718	634	3.7%	70	4.0%
イカ	145	261	373	447	579	618	473	2.7%	39	2.0%
ラ・リベルタ	417	626	825	1012	1287	1391	974	5.6%	104	6.0%
ランバイエケ	200	354	533	709	951	1029	829	4.8%	78	4.5%
モケグア	36	53	78	103	130	140	104	0.6%	10	0.6%
ピウラ	431	692	888	1156	1409	1487	1056	6.1%	78	4.5%
タクナ	38	68	100	148	224	254	216	1.2%	30	1.7%
トゥンベス	26	57	79	108	159	179	153	0.9%	20	1.2%
(山岳地帯)	4239	5260	6304	7302	8709	9163	4924	28.4%	454	26.2%
アンカシュ	469	609	761	862	984	1035	566	3.3%	51	3.0%
アブリマク	280	304	321	343	396	413	133	0.8%	17	1.0%
アレキーバ	271	407	561	738	939	1017	746	4.3%	78	4.5%
アヤクチョ	414	430	479	524	512	519	105	0.6%	7	0.4%
カハマルカ	555	770	940	1063	1298	1360	805	4.6%	62	3.6%
クスコ	565	648	751	874	1066	1117	552	3.2%	51	3.0%
ワンカベリカ	266	316	347	362	400	418	152	0.9%	18	1.0%
ワヌコ	272	349	427	499	678	732	460	2.7%	54	3.1%
フニン	381	547	720	897	1093	1147	766	4.4%	54	3.1%
パスコ	120	153	184	230	239	245	125	0.7%	6	0.3%
プーノ	646	727	813	910	1104	1158	512	3.0%	54	3.1%
(森林地帯)	557	735	1012	1330	2064	2327	1770	10.2%	263	15.2%
アマゾナス	90	129	213	268	354	384	294	1.7%	30	1.7%
ロレト	294	321	410	516	736	819	525	3.0%	83	4.8%
マドレ・デ・ディオス	25	25	25	36	70	77	52	0.3%	7	0.4%
サン・マルティン	121	170	234	332	572	667	546	3.1%	95	5.5%
ウカヤリ	27	90	130	178	332	381	354	2.0%	49	2.8%
(リマ首都圏)	662	1902	3418	4836	6343	7059	6397	39.6%	716	41.3%

出所： “ Peru 97 ANUARIO ESTADISTICO ” S.A.,1997, pp.201-203 福井 (1999) p.63

%であった。人口の大都市（リマ、カヤオ、およびその周辺）への一極集中が著しく起こっているのである。

この動きの背景として考えられるのは、フジモリ政権下の一連の施策であろう。すなわち非合法街区における合法化の推進で、例えばバリアードスにおいて「土地所有登録証」を発行したり、リマのボルボス・アスーレスプロジェクトでショッピングセンターを建設し立売人を収容したり、「タクシー運転手登録証」を発行したりすることによって、都市への移住者の魅力が増し、農村部からの移住希望者が増大したと考えられるのである。

これまで眺めてきたリマ首都圏への人口の一極集中は、バリアードスの展開という現象で捉えることが出来る。下の表6からは、50年代末にすでに187ものバリアードスがあるものの、その後の40年で10倍にも膨れ上がっていることが読み取れる。バリアードスに居住する人口も1970年にはリマ市民の4分の1に達し、90年代には3分の1を超えているのである。すでに述べた農村部から都市部への第一次移住ブーム（1961 - 72年）と第二次移住ブーム（1993 - 97年）も、表6や図10からバリアードスの数や人口と高く相関していることが分かる。すなわち1961年に32万人弱であったバリアードス人口が1970年には倍以上の76万人強になり、リマ市における人口比も17%から25%へと激増し、第二次移住ブーム期にはなんと1400近くものバリアードスが誕生し、リマ市民の4割近くを担うに至っているのである。

表6 20世紀後半のリマにおけるバリアードスの推移

年次	バリアードス数	累計	バリアードス人口	リマ内%	平均人口
1956	56	56	119,140	10.0	2,127.5
1959	131	187	236,716	14.0	1,265.8
1961			316,426	17.0	
1970	50	237	761,755	25.0	3,214.0
1976	82	319	1,113,000	27.0	3,489.0
1981	89	408	1,329,600	28.8	3,258.8
1984	190	598	1,617,786	32.2	2,705.3
1993	549	1,147	2,188,415	34.4	1,907.9
1998	833	1,980	2,623,000	38.0	1,324.7

出所：Instituto Nacional de Estadística e Informática, 1997他（Cockburn, p.182より作成）

（p.83表3 [Meneses, M. *La utopía urbana*. UNMSM-INCA-URP, Lima] とのバリアードス数の不一致について、クックバーンは、INEIが公式に認定された区数のみを採用しているため、と注記している。）

1960年代から70年代の街区の展開を図11で見ると、従来からのリマック川右岸（北岸）の自然堤防上から氾濫源（Rio Rimac floodplain）へと拡大し、さらにはアンデス山裾の小さな砂丘陵列（Andes foothills）の傾斜変換線沿いに北へと延び、それらの斜面をはい上がっているのが見てとれる。その間に例えばCarmen de la LeguaやComasといった区が誕生している。70年代にはいるとそれらがより北へ、かつより厚みを増し、さらにリマの南方砂漠地帯へと拡大していく。例えばVilla El Salvador区（VES）の誕生である。

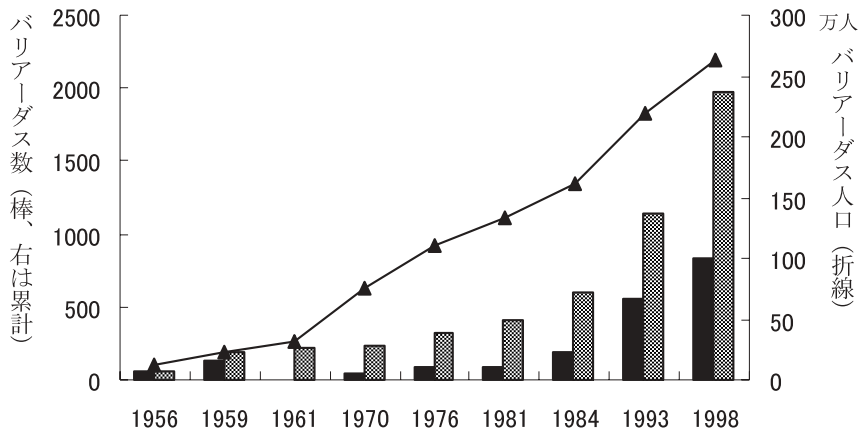


図10 20世紀後半のリマにおけるバリアーダスの推移
(Cockburn, p.182 より作成)

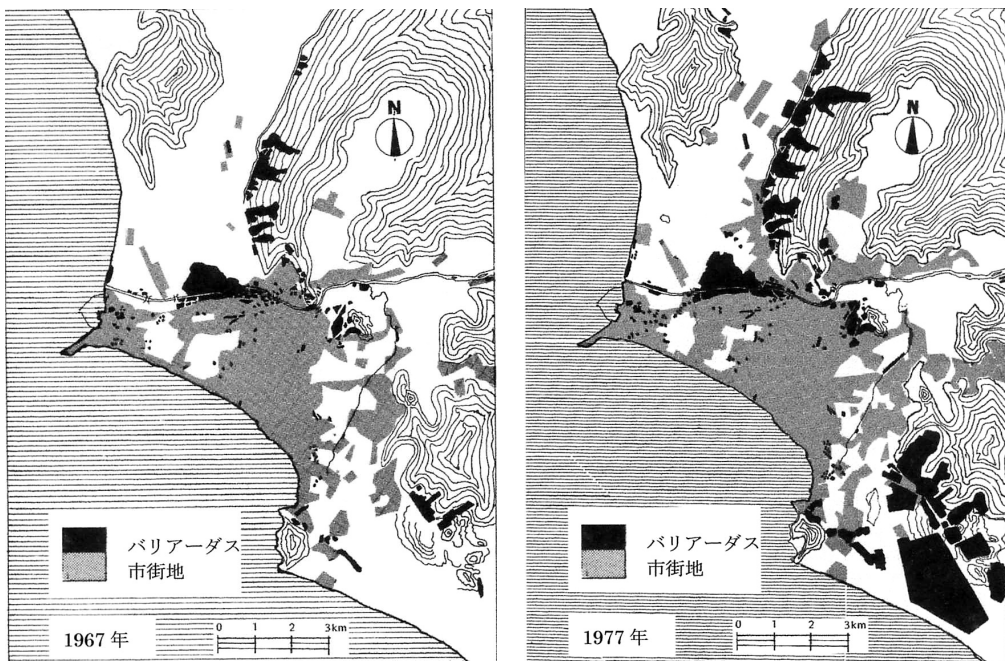


図11 大リマのバリアーダス（黒色）の拡大（左：1967年 右：1977年）
Mar（1977）による。

3 バリアーダスの地理的分布

図12は、表7を基にして、リマのどの辺りにバリアーダスが展開していったかをほぼ10年刻みで見えていったものである。60年代初頭にはまだまだ街中のスラム（インナーシティー）が中心であったこと（例えば中央丘部のSan Cosmeやリマック川左岸氾濫源のCarmen de la Legua）

郊外ではまず北方に出現してくることが分かる。その後は、中央部の増加は緩慢としているが、北方への展開は着実に漸増している。パナメリカーナ・ノルテに沿って、その両サイドの砂漠地帯をチリヨン川（Rio Chillon）方向へ延びていっているのである。リマ市街に隣接するリマック川右岸のSan Martín de Porras（SMP）は60年代がピークで、パンアメリカン東側のEl ErmitanoやComasは50年代から60年代に始まり、その後も成長を続けていっている。西側のLos Olivosは90年代に入ってから急成長を遂げている。

図12・表7 リマ首都圏におけるバリアードスの方面別展開

図12

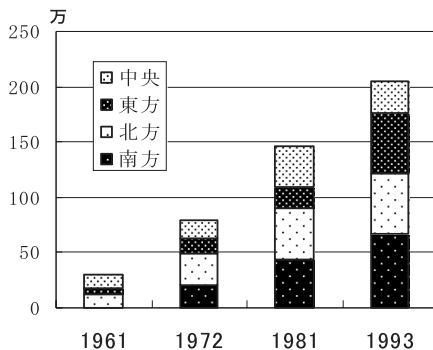


表7

方面 / 地区	1961	1972	1981	1993
Cono Sur	1.5	25.7	30.1	30.51
VMT	1.2	17.7	20.0	9.93
SJM	-	2.6	6.0	7.9
Chorrillos	0.3	5.4	4.1	5.2
VES	-	-	-	7.68
Cono Norte	36.7	34.3	31.29	25
Comas	11.5	15.5	11.2	8.8
Independencia	-	12.3	7.1	3.9
SMP	24.5	2.9	10.1	1.28
Carabayllo	0.4	3.0	2.19	2.52
Puente Piedra	0.3	0.6	0.7	2.36
Ventanilla	-	-	-	2.7
Los Olivos	-	-	-	3.4
Cono Este	16.2	16.5	13.88	25.1
El Agustino	10.8	4.5	6.0	2.7
Ate	2.5	1.0	0.32	4.4
SJL	0.3	6.5	4.78	14.9
Chaclacayo	0.5	1.5	1.22	-
Area Central*	39.4	20.6	29.04	13
TOTAL	316,426	814,931	1,459,865	2,188,445

* Callao, Lima, La Victoria, Rímac, Breña y Carmen de la Legua.

出所：Censos Nacionales de Población y Vivienda de 1961, 1972, 1981 y 1993
(Cockburn, p.189 より作成)

70年代以降のバリアードス化の大きな特色は、なんといっても東と南への急激な展開である。東方では、最もセントロに近く40年代からスラム化が進んでいたEl Agustinoが頭打ちとなり、替わって、リマック川右岸で、リマ北東の砂丘の窪みに出現したSan Juan de Lurigancho（SJL）地区が90年代以降急増している。南方への展開は最も遅く、パナメリカーナ・スルの東側砂丘列の傾斜変換線沿いにVilla María del Triunfo（VMT）が70年代から80年代にかけて急激に展開した。80年代以降はその麓にSan Juan de Miraflores（SJM）が、90年代に入るとさらにその南方ルリン川（Rio Lurin）近くにVilla El Salvadorが、急速に成長してきている。

図13はチェンバースが描いたものをベースとしたが、上述の内容は補えるものの、90年代以降近年までの姿は描ききれない。すなわち、北方への展開はとどまることを知らず、今やアンコン市（Ancón）やワラル市（Huaral）に接近して行っているのである。表7に示されているパナメリカーナ・ノルテをチリオン川を越えてさらに北進した地のPuente Piedraや、海岸線沿いをカヤオ市からアンコン市方面へ北上したVentanilla地区がそれに当たる。リマ市内まで1時間を超える通勤距離ではあるが、今やマイクロ・バスが頻繁に通う地区へと成長していつている。それらの地域を含んだ図として、鮮明さには欠けるが、リマの道路マップの付図¹⁰⁾を示しておく（図14）。

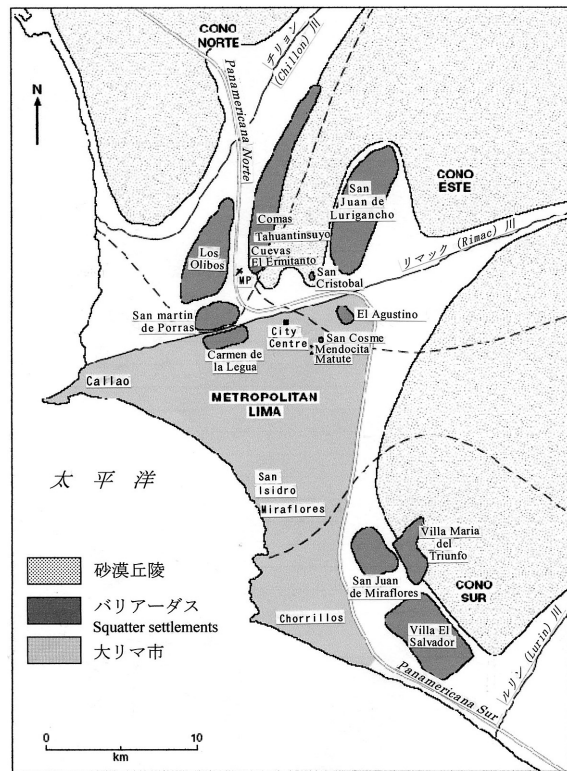


図13 大リマ周縁のバリアードス
(Chambers, 2005, による)

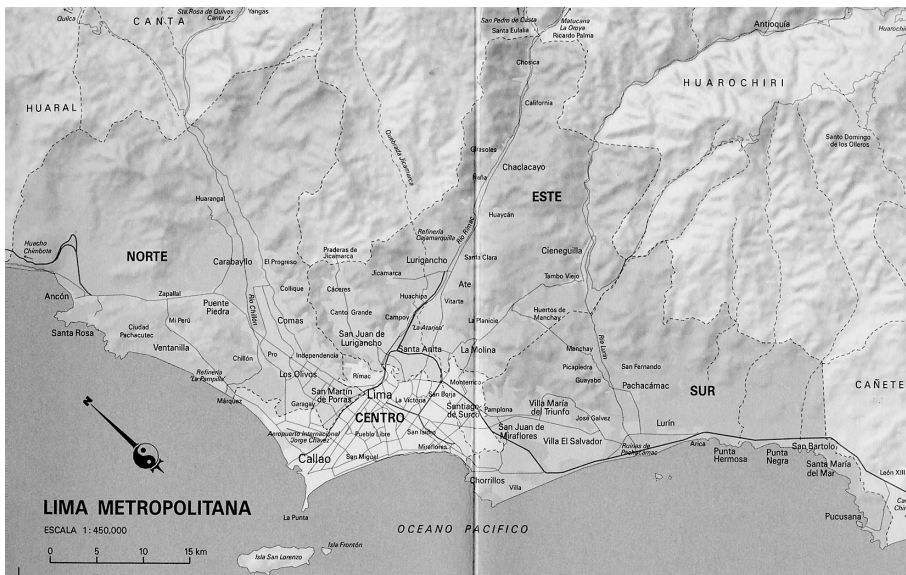


図14 大リマ概念図 (LIMA - GUIA DISTRITAL 2005 による)

バリアードス社会

1 住まいの変遷

建築計画研究所都市梱包工房の入之内瑛氏は、「世界の集落と住居」の集落調査レポートの中で、「オアシスの町とバリアードス¹¹⁾〜一夜にできる不法占拠の町」と題する一文を掲示している。大変わかりやすい文章であるので、ここにその一部を紹介する。

狙われ易いのは都市郊外の公園や広場、空き地等である。そうした場に数戸のバラックが建てられると、翌日はその数倍に、そしてその翌日はさらにその数倍に膨れ上がってしまう。極端な話、一夜にして小さな町が出来てしまうのだ。

バラックの造りはユニークである。板の切れ端、ダンボール紙、トタン板、ビニール、ヨシズ、布、石……等。都市に在るもの、落ちているもの、何でもが彼らの住まいの材料になってしまう。購入するものなど何もない。彼らは街で調達すると言う。

お金を出さないで手に入れるのが調達することなのだ。そもそも土地も彼らの物ではないし、そこに住む許しも得てはいないのだ。不法占拠の町、こうした場を南米では「バリアードス」¹²⁾とか「ファベラ」と呼んでいる。

正確とは言えないが、インフォーマルな「自助建設」によるバリアードスの進行過程が端的に示されている。

さて、その住まいの自助建設過程について、チェンバーズはchose (matting hut) → peripheral wall → internal walls → concrete roof → second floor → Moreといった順を示す。まずは葦簀^{よしず}張りからスタートし（写真 1 ）、次いで粗末な壁を設け、それがまともな内壁へと進化し（写真 2 ）、さらにコンクリートの屋根が葺かれ（写真 3 ）、2 階も設けられ（写真 4 ）、より進化する、といった流れである。具体的には、葦簀に替わってセメント袋やポリエチレン製のシートがかけられ、小金が貯まればアドベ（日干し煉瓦）やレンガでプロット（小区画、しばしば 8 m × 20 m ）を囲み、それらを間仕切りにも用いて小部屋を造り、床は泥を固めたりアドベを敷き詰め、さらに壁面が鋼材で補強されると鉄筋コンクリートの屋根が葺かれて 2 階が出来、玄関はもちろん内部のドア、ガラス窓などがはめ込まれ、タイルが貼られたり漆喰が塗られたりして、まっとうな家へと変わって行くのである。

ただここまで変わりうるためには、少なくとも10年以上の歳月がかかる。おまけにステップ・アップ毎にかかるコストも高くなる。住まいの大半は、専門家による指導や設計、許可、住宅の質的コントロールのないインフォーマルな自助建設である。土地の不法占拠に始まり、最低レベルの住宅を獲得するまでに長年かかり、しかもコストは非常に高い。ただこの経年変化に伴ってインフラ整備も整い、やがてはフォーマルな街区と認識されるに至っていくのも事実である。

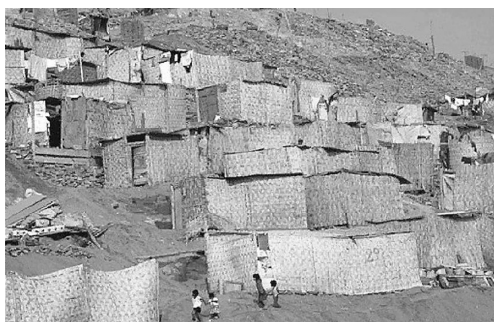


写真 1



写真 2



写真 3



写真 4

2 住民の生活

チェンバーズは、バリアードスが変質して行く過程を、家屋以外の他のインフラ整備も含めて経年でまとめているが、それをベースに整理すると次の表 8 のようになる。

表 8 バリアードスの経年変化 (Chambers, 2005, による)

経年	家 屋	水	燃 料	教 育	店 舗	道 路
1-2	葦簀張り	ドラム缶 タンク	灯油 パラフィン	私的施設	食品店 屋台 パール	露地面
4-5	壁 仮設屋根	水汲場	発電機	初等学校	薬局 映画館 カフェ	鎮圧路 簡易舗装
10-12	コンクリート屋根 平屋	水道管	供給	中等教育	文房具店 パン屋 駐車場	舗装道路
20-40	貸部屋 賃貸し	供給		短大 大学	モール 製造業 レストラン	幹線道路

家屋に関しては先述したが、各インフラ整備に関してはやはり10年以上の歳月がかかる。水に関して言えば、一日1回訪れる給水タンク車へバケツなどを持参して買いに行く生活が数年は続く。それも砂塵をあげてやって来るところへである。熱源や灯りに関しては、薪炭や蠟燭・ランタンからスタートし、簡易コンロからプロパンへ、また自家発電や盗電による電化へと進んで行く。身近に電信柱が立って受電できるようになったりガス管が埋設されるまでには、やはり10年以上は待たなければならない。それらを基にする店舗も、自ずと表通りに面した屋台式な飲食サービスからスタートする。既存の道路に近い方が早く路面が踏み固められ、仕入れや盗電にも便利だからである。道路沿いのほの明るい店舗が、産声をあげたばかりのバリアードスであることを象徴している。表には項目のない汚水・下水であるが、当初は当然垂れ流しである。砂漠の上に真新しい人間の糞尿が散在し、カメラを持って歩くのに往生したことを思い出す（写真5）。それが流しやトイレが設置されるにつれて、少しは改善されてくる。それぞれの地中に底に穴がけられたドラム缶を埋めていく方法であるから、地表面の汚れはましになってはいるが、砂土中のそう深くないところから汚水は染み出ており、衛生環境はなかなか改善されないでいる。



写真5 1982年筆者撮影のリマ市近郊のプエブロ・ホーベン（地区名称不明）

このようなバリアードスに居住する住民は、かつては肉体労働者が多数を占めていた。表9の中の「労働者」や「独立」には、労働集約的な運搬手伝い、車の拭き掃除、軽運送などの個人サービス、路上での立ち売り、きわめて零細な店舗（路上に台を置くような）販売などが含まれている。だが1990年代以降は、リマ市内のオフィスや店舗で働く従業員の比率が高くなってきている。中・高級住宅街で家政婦として働く女性も増えてきた。それだけ都市化が進んだとも言えるし、スラムと言うよりは大衆（貧困層・低所得者層）居住区という表現の方が似つかわしくなってきたとも言えるのである。

ただ地方の農山村の貧困層・極貧層がリマをめざして流入してきていることに変わりはない（図15）。彼らの生活は昔ながらの葦簀張り住居からスタートするわけで、そういったバリアードスは図13の範囲内をさらに越えた縁辺部に展開するようになってきた。その分、より内側の古くからのバリアードスは、インフォーマルからフォーマルな地区へと変質してきている。

バリアードスやその非合法住民の合法化は、ペルー政府にとっても貧困改善対策の重要な課題である。住民の側も、生活の安定化のために土地の所有権獲得、商活動の権利獲得などの

表9 バリアードス住民の職種(%)

年	1978	1981	1993
労働者	44	41	21
店員、事務員	24	22	42
独立	23	26	24.5
調理人	4	3	5.5
家政婦	0.83	0.60	3.5
親方、主人	0.21	2	3.5

出所：Meneses, 1998

Cockburn (2005) p.250

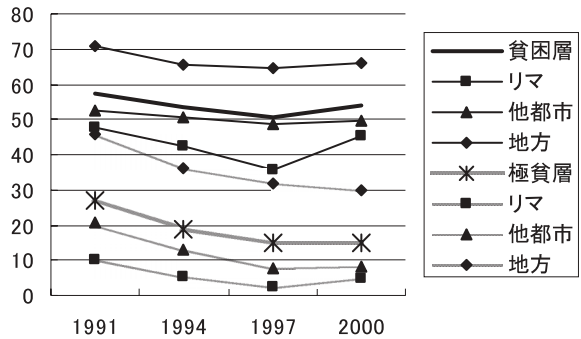


図15 ペルーにおける貧困層の推移(%)

出所：Foncodes, en La República, 05.08.01 Cockburn (2005) p.155

合法化（フォーマル化）の努力を長らく続けてきた。20世紀の間の紆余曲折の後、フジモリ政権下の1996年、法令803号が公布されて「土地の不法居住承認委員会（La Comisión para la Formalización de la Propiedad Informal : COFOPRI）」が創設され、バリアードス居住民に土地の所有を恒久的に保証する土地登録証の発行が実施されたのである。表10および11は、福井が現地調査で得た資料をもとに作成したものである。この土地登録証の発行は、リマ市や政府の土地であった不法占拠地を、超法規的に不法占拠者に土地所有権を与えようとするもので、完全な合法化とは言えないまでも、現実的には社会的承認を得たことで非合法地の所有権が恒久的に保証され、プエブロ・ホーベネスに住む貧困者の生活を安定させ、さらに、ローンの獲得や保証の手段が与えられるなど、商業活動や零細企業の設立に必要な多くの経済的支援に結びつき、貧困層の生活権の確保に向かって前進した、と福井は集約している。¹²⁾

表10 1998年1月 COFOPRI 非合法定着地の
所有権登録証の発行状況

地 区 名	登録済	調査中	他	計
ラ・ビクトリア	12	135	7	154
プエンテ・ピエドラ	25	0	2	27
サンファン・デルリガンチョ	187	121	25	333
サンファン・デ・ミラフローレス	715	2,500	207	3,422
ビジャ・デ・サルバドル	710	19	41	770
ビジャ・マリア・デルトリウンフォ	1,290	2,289	195	3,774
合 計	2,939	5,064	477	8,480

出所：“Informe Estadístico Enero 1998”,
COFOPRI GERENCIA DE CAMPO. 1998
福井 (1999) p.70

表11 COFOPRI による土地所有
登録証発行状況

地 区 名	1996年	1997年	合計
	7-12月	1-4月	
コノ・ノルテ	16,969	7,928	24,897
コノ・スル	13,617	15,604	29,221
コノ・エステ	5,294	7,951	13,245
合 計	35,880	31,483	67,363

出所：PERU 97 ANUARIO
ESTADISTICO, 1997, CUANT S.A.,
pp.378-379 福井 (1999) p.70

3 ある日本人夫妻の滞在記

2006年の秋、バリアードスに住まいを設けて定住している日本人夫妻から、詳細なレポートを入手した¹³⁾。本稿でこれまで述べてきたことの最新の実態事例として紹介する。

この五十川大輔・響子夫妻は、国立フェデリコ・ビリャレアル大学（UNIV. NAC. F. VILLAREAL）社会科学部社会福祉専攻に身を置き、実習などを通してプエブロ・ホーベンを訪れる機会を頻繁に

持った。その間のヒヤリング調査などでもなかなか信頼関係が築けず、ついには自ら一住民になり、彼らの視点からこの社会を眺めてみようと思ったのである。夫妻が定着した地は不法占拠が始まったばかりのオアシス地区（OASIS, EL）で、リマの中心部から北東に約35kmの地点である（図16）。カヤオ特別県のベンタニーリャ区（Ventanilla）に属し、すぐ北はアンコンの町である。図13には入らずさらにその北西方で、図14の左手にその区名が読み取れる。オアシス地区の周辺には不法占拠が可能な土地が豊富にあることから、政府の貧困層に対する居住地提供計画が設定されている。その一角のオアシス地区も44のブロック（manzana）に分けられ、レポートの時点で1200世帯ほどが生活している（写真6）。

さて土地は、不法占拠開始時より、事前に用意された都市計画地図に基づいて区画整理がおこなわれ、住民に対してほぼ均等に分配された。一区画は間口7m、奥行き20mの140平方メートルである。行政によって正式な居住区として認められ、土地の所有権が居住者におりるまでは、不法占拠のリーダーたちが土地の管理や売買をおこなう。不法占拠開始時より参加していた者に対しては無償で提供していた土地も、行政との交渉が進み、生活インフラが整ってくるにしたがって、価格が上昇する。当初一区画25ソル（2006年8月で1ソル約36円）だった土地が、五十川氏が購入したときには1000ソルにまで跳ね上がっていた。土地の売買益のほとんどは、不法占拠のリーダーたちによって結成された自治会（Junta Directiva）メンバーの懐に入るという。

不法占拠が始まると同時に、建築資材を扱う店が地区内に数軒建つ。ペルーの海岸部は年間を通してほとんど雨が降らないため、むしろで囲った葦簀張りの家屋でも、生活空間としての機能を果たす。エステラ（estera）と呼ばれるむしろはカリソ（calizo）という葦の一種を裂いて編んだものであるが、1枚が約6ソルである。船舶貨物の積み降ろし時に下に敷かれていたパレット廃材を加工した壁板は、一面（2m×2m）当り50ソル前後である。アドベは千個当り90ソル、レンガは同じく140ソルほどで売られている。

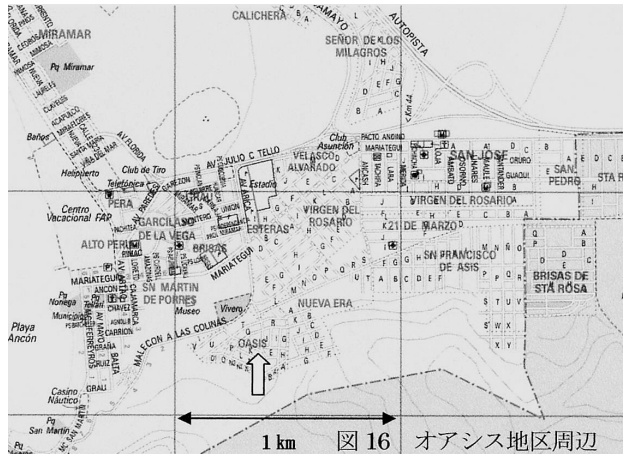


図16 オアシス地区周辺

五十川氏は敷地の半分に地区の保育所として利用してもらうための廃材のプレハブ小屋を建築したが、基礎工事はなく、砂利を敷き詰めた上にコンクリートを敷いた床、ビニールシートの上にむしろを載せただけの屋根である（写真7）。残りの住居部は、壁面を土レンガにした。屋根は竹を敷き詰めてその上にビニールシートをかけ、さらにセメントで蓋をしている。キクイムシが竹を食い荒らし、その屑が降ってくるので、米袋で作ったシートで天井を覆っているという（写真8）。

水は、朝6時半頃からクラクションを鳴らして地区の通りを駆け回る給水車（写真9）から買う。150リットル当りで1 - 2ソル、50円ほど支払う。水は台所・シャワールーム・ドラム缶風呂（写真10）・トイレ（写真11）で使用する。下水道はないので、ドラム缶を二つ繋いだものを地中に埋め、底に小さな穴をたくさん開けることによって、水分を徐々に地下に染み出していくようにしている。近隣には生活污水を道路にまいて処理する人が多く、非常に不衛生である。風呂は調理用に売られているパレット廃材を利用して炊き、残り湯は洗濯に使う。電気は約2年前に敷設されたが、それまでは灯油ランプやバッテリー、蝋燭を用いていた。電話はまだ通っていないが、近くに公衆電話がいくつかある。

働く子供たちの運動体に関わっている五十川夫妻は、彼らから学ぶところが非常に多く感銘を受けているという。そして、彼らの思想体系を掘り下げて学び続け、実践活動にも積極的に関わって行きたいと考えている。近い将来には、働く子供たちの小学校、中学校をこの地区に設置したいと思っている。遠く離れてはいるが、声援を送りながら見守り続けたい。



写真6 オアシス地区 左手は海岸)



写真7



写真8



写真9 水売りの車 aguatero



写真10



写真11

(6 ~ 11、五十川氏撮影)

むすびにかえて

本稿で扱ったテーマは、あまりにも大きい。その割には既存の研究は稀薄であった。主に都市社会学や経済政策、公共政策・福祉、保健・衛生といった分野の研究者が取り組んできている。この分野に地理学がどう向き合えるのか、歴史地理学徒の筆者には荷が重すぎて確かなことは言えない。そもそもインカ王道の調査を目的に、ペルーをフィールドとしてきた。ただ訪れるたびに、フィールドへの道中で膨れ上がっていくバリアードスを目の当たりにし、気にはなっていた。2006年の渡秘の際、2～30年来たびたび見てきたX字型に交叉するインカ道とその付近の二重のストーンサークルが砂に埋没しつつあるのに驚いたが（写真12）それ以上に、かなりリマから離れている（アンコンの北東数km）にもかかわらず、かつては微塵もなかったバリアードスがじわじわと迫ってきているのに大きなショックを受けた。ペルー北部のチムー帝国の首都チャン・チャン（Chan Chan, 1986年ユネスコの世界文化遺産に登録）に不法占拠者がいるというニュースは耳にしていたが、遺跡や遺構がエル・ニーニョや地震といった自然災害で破壊されるだけではなく、今や人為的な破壊にも直面してきているのである。そのような環境の中で、近年、「遺跡の盗掘や破壊と地元住民との共存」について考えてみるようになった。¹⁵⁾これが本稿を草したきっかけでもある。2006年にクックバーンの“*La ciudad ilegal Lima en el siglo xx*”を入手したことも大きい。その結果として不案内な分野に手を染めてしまったのだが、地理学も加わる必要のあるきわめて学際的な問題であるとも思う。その視点で、これからも関わりを持って行きたい。



写真12 Ancón北東のチャスキワシらしきストーンサークル
（左1974年7月、右2006年8月筆者撮影）

〔注〕

- 1) Juan Gunther Doeringu “PLANOS DE LIMA 1613-1983” Municipalidad de Lima Metropolitana, Lima, 1983.
- 2) 「ペルー住宅政策概要 - 国家住宅政策に向けて - 」、運輸・通信・住宅・建設副省、2002年、p.36.
<http://members.at.infoseek.co.jp/ebizuka/peruJ.pdf>
- 3) ペルーでは、クアント社が全国生活水準調査（ENNIV）を、国家統計情報局（INEI）が全国生活水準

調査（ENAH0）を実施し、貧困の測定基準データを収集している。世界銀行もクアント社のデータを用いて貧困ラインを算出している。ただペルーの2機関が必要最低摂取カロリーを基準に食糧バスケットを構成し、そこから算出される金額を「食糧貧困ライン」と定め、それに食糧以外の必要支出項目を加算して「総合貧困ライン」を設定しているのに対して、世銀はまず食糧とそれ以外の必要支出項目から算出された「貧困ライン」を定め、その3分の2を「極貧ライン」と設定している。そして、総合貧困ライン（世銀の貧困ライン）以下を「貧困層（Pobres）」、食糧貧困ライン（極貧ライン）以下を「極貧層（Pobres Extremos）」と分類している（「貧困プロファイル要約 ペルー共和国」、国際協力銀行、p.1）。一方、国際的な比較における貧困の尺度としては所得が基準となっており、OECD開発援助委員会（DAC）報告は、「極端な貧困」の基準として世銀による一人当たり370ドルの年間所得（ほぼ1日1ドル）を設定している（絵所秀紀・山崎孝治編『開発と貧困』アジア研究所、1998年、p.3）。

- 4) 福井千鶴「ペルーにおける都市化と貧困問題 - リマ首都圏における現状とその改善策の一考察 - 」、『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）第2巻第1・2合併号、1999年、pp.57-73.のp.59。
- 5) Bill Chambers 'The Barriadas of Lima: Slums of Hope or Despair? Problems or Solutions?' Geography Autumn 2005 [Geographical Association-Journals] pp.200-224, Downloaded from www.geography.org.uk
- 6) Julio Calerón Cockburn "La ciudad ilegal Lima en el siglo xx" Fondo Editorial de la Facultad de Ciencias Sociales UNMSM (Universidad Nacional Mayor de San Marcos) Lima, 2005.
- 7) José Matos Mar "Las barriadas de Lima 1957" Instituto de Estudios Peruanos, Lima, 1977, p.9.,p.20.
- 8) 福井千鶴、前掲注4) p.62。
- 9) José Matos Mar、前掲注7) pp.10.11。
- 10) Oliver Perrottet " LIMA - GUIA DISTRITAL 2005 " 2005, EDITORIAL LIMA 2000 S.A.C.
- 11) 入之内瑛「世界の集落と住居」第22話、2002、<http://www5.ocn.ne.jp/~toshikon/public-vil-22-2.html>
- 12) 福井千鶴、前掲注4) p.69-71。
- 13) 筆者がペルーを訪れる際に寄る辺としている天野博物館（Fundacion Museo Amano）で、2006年8月に紹介を受けた。ただ面接してヒヤリングする機会は持てず、後日メールでレポートを送付してもらった。
- 14) 関雄二「盗掘者の論理と発掘者の論理：北部ペルーの遺跡保護をめぐる諸問題」、『天理大学学報』183、1996年、pp.197-214。
- 15) 梅原隆治「ペルーにおける遺跡の盗掘・破壊と共存」「リマにおける肥大化するスラム（プエブロ・ホーベン）」、漆原和子・藤塚吉浩・大西宏治・松山洋編『図説 世界の地域問題』、ナカニシヤ出版、2007年、pp.66-69。

The transfiguration of Barriadas (an illegal district) in Lima

Takaharu UMEHARA

Abstract: There are many slums that are called pueblo joven or barriadas in Lima, Peru. As for the first half of the 20th century, the slums were unfolding in the middle and Rimac riverside of the city area. However, in the second half of the 20th century, many people came from the rural area of Peru to Lima, and numerous barriadas started to unfold in the Lima area. About 2,620,000 people, which is about 38% of about 6,900,000 people, the overall population of Lima city in 1998, were residents of the barriadas. The houses are made with reed blind or adobe because of its desert climate. About 55% of the poverty layer is living in the urban region of Peru. This paper reports the change of the illegal district of Lima's periphery, including a report of a Japanese couple living in barriadas.

Key words : Lima, barriadas, pueblo joven, slum, civic problem, illegal district